

---

# 高機動幻想ガンパレードマーチ～風を渡る悪の親玉(ラストボス)～

自称魔法使い

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

高機動幻想ガンパレードマーチ〜風を渡る悪の親王〜  
ラストボス

### 【Nコード】

N7464X

### 【作者名】

自称魔法使い

### 【あらすじ】

前回、投稿していた「高機動幻想ガンパレード・マーチ〜風を渡る正義の武装探偵〜」が作者が色んな事をさせたいと入れすぎて結果的に主人公のキャラがぶれまくったりすると言う、大事故が起きました（泣）

そこで、きちんとした物語構成を作る為に、リニューアルします！！

また、作者は懲りずに無計画ですけど…（汗）

なので、感想やこうした方が良いよ？などアドバイスもドシドシ下さい

出来れば、内容以外で…（笑）

## プロローグ（前書き）

というわけで、プロローグです

短いですが、どうぞ（笑）

## プロローグ

「……………さて、行くか……………」

まんまるい満月が昇る夜

大きな屋敷の中庭で一人の背の低い少年が呟いた

頭に被った猫の耳の様な形をした黒いニット帽が月明かりに照らされている

「もう、ここには居られないからなあ…。まあ、仕方がないか…」

少年は自嘲する様に悲しく笑みを作ると、そつと中空に指を奏でる

「……………」

少年を中心に難解な文字が刻まれた陣、魔方陣が広がる

「……………私に黙って行く気？」

『っ！？……………ふみこ……………』

バツと後ろを振り変えると、そこには桃色の髪に眼鏡をかけた美女と言ってもいい女性【萩ふみこ】が不敵な笑みを浮かべていた

「…もう一度聞いわ、私に…私達に黙って行く気？」

こちらを真っ直ぐに見つめてくるふみこに少年は苦しそうに視線を反らす

『…………俺は、【アイツ】にとって仇だ…。これまで通り、ここに居ることは出来ない…………』

「…………あの子が…【光太郎】が本当にあなたの事を仇だと思ってるの？」

その言葉に少年は視線を反らし俯いた顔を上げる

そこには、先ほどまでの苦しそうな表情はなく、どことなく儚い苦笑いを浮かべていた

『ハハッ…、そうだな。アイツは馬鹿だから多分そんな事、少しも思っていないだろうな…』

「なら、『けど…』…」

ふみこの声を遮った少年の目にはある種の決意が見てとれた

『多分、アイツが帰って来たら、今よりもっと強くなってる様な気がするんだ』

少年は、雲一つ無く小さな星が輝く空を懐かしげに見上げながら言葉を紡ぐ

『だから、俺も行くよ…、強くなるために、俺が俺であるために、そして……………【ケジメ】をつけるために…』

少年は、空を見上げていた視線をふみこへ戻し、笑みを浮かべる

『だから……………【行ってきます】だ』

それは、苦しみや悲しみを一切感じさせない清々しいまでの笑顔だった

「…………そう、なら私はあなたを送り出すだけよ…」

ふみこが少年がやったものと同じ様に中空に指を這わせる

少年を中心に淡く青色に発光する魔方陣が形成される

『…………ふみこ』

「…なに？」

細く白い指先は、中空を軽やかに踊る事を止めない

『…………えっと、その、な…………』

淡い青色の発光は更に強く、魔方陣も大きくなっていく

『……………ありが、とな……………／／／』

「……………」

一瞬、本当に一瞬、中空を踊っていたふみこの指がピタッと止まった

「……………気にすることはないわ」

フツとふみこは口許に笑みを浮かべながら答える

魔方陣が一層輝きを強めると、ふみこは中空で踊っていた指を下ろした

「第5世界に繋がたわ。逝ってきなさい」

『……………なんか不穏なものを感じたんだが…（汗）』

気のせいよとふみこは、クスクスと笑う

『ん…、まあ良いか。じゃあ、行ってきます！…！』

少年は片手を上げて別れを告げるとあっさりと、拍子抜けする程あっさりと【消えた】



少年が消え、魔方阵が消えた中庭で、ふみこはただジツと臍氣に光る満月を見上げる

数分後、そつと踵を返し屋敷へと戻っていく

「……………あなたは【光太郎】と同じくらい良い男なんだから、ちゃんと帰ってきなさいよ……………」

そつと、もうこの世界には居ない少年へと呟く

「……………いつてらっしゃい、【如月クオン】。イヤ、【自称・悪の親玉】さん……………」

## プロローグ（後書き）

..... 最早、主人公の名前以外は全くの別物ですね（苦笑）

次回ものらりくらりと書いていきます

## オリ主紹介（前書き）

というわけで、2日連続投稿できました…（汗）

今回は、主人公の紹介ですのでメッサ短いです（笑）

それでは、どうぞ

## オリ主紹介

きんぐ  
如月クオン

年齢：18才

身長：160cm

体重：50kg

好き：悪、イタズラ、睡眠、  
鮭の塩焼き

嫌い：なんちゃって正義

オーマネーム：赤にして悪

異能：空間倉庫

容姿：紅くサイドと目の間の髪を伸ばした髪型。髪と同じく紅い瞳でややツリ目でそこそこ美形。常に猫の耳の様なトンガリをした黒いニット帽を被っている。

詳細：式神の城の舞台である第6世界から第5世界ガンパレードマ―チにやって来た小柄な少年。式神の城の【玖珂光太郎】とは親友兼ライバルの様な関係で光太郎が正義の味方を心情にしているのに対して【悪の親玉】を心情にしている。しかし、悪の親玉と言いなからちやる事は小さなイタズラ程度である（笑）

身長が160cmと小柄な為、身長のことと触れられるとキレる（笑）

キレると最早、主人公とは思えない程の悪人顔になる（例えば烈火の炎の烈火が怒った時みたいな）

家族関係に関しては不明な点が多い

因みに絶技（魔法）以外にも生物以外の物を収納できる異能【空間倉庫】を持っている

## オリ主紹介（後書き）

今回は、こんな感じでしたが段々増やしていこうかなあと思ってます。

今回で、【式神の城】の事なんかが、少し出てきて分からない人がたくさんいると思います（汗）

まあ、マイナーなゲームですしね（笑）

【式神の城】はシューティングゲームとしてアーケードや家庭用ゲーム機に発売されたゲームです。

1〜3まで出ており、人物関係や世界観が奥深くて作者は気に入っています（笑）

他にも、外伝としてアドベンチャーゲームになったり、漫画、小説などにも成っています。

文に対しての要望や感想、アドバイスがありましたらドンドン書き込んでください

## 第一楽章『ファーストコンタクト』（前書き）

ようやく、第一話完成です

しかし、書いててもう一捻り欲しいなあとか

もう少し長く書けたらなあとか

どうしても思ってしまいます（泣）

まあ、そんな訳で今回は短いですけどどうぞ（笑）

## 第一樂章『ファーストコンタクト』

「今日、新しく編入される人ってどんな人なんだろうね？」

5121小隊が間借りしている女子校の校門を歩きながら、ポヤヤンとした優しいな雰囲気少年【速水厚志】は自分より前を歩く黒髪の少女に言った

「……………」

黒髪の少女【芝村舞】は、振り返ることもなく、ズンズンと歩みを進める

「……………ねえ、ひょっとして怒ってる？」



「…………別に怒ってなどいない…」

……嘘だ!!

速水はそう思いながらも黙って舞の後ろをついていく

舞は、不機嫌な顔を隠すことなく、校門をくぐり桜が咲く道を歩いていく

「…………でも、凄いね。編入初日にバスで寝過ごして遅刻。オマケに迷子になったから向かえに来てくれなんて……………」

「……………まったく、あのうつけ者が……………」

「?その人と知り合いなの?」

「……………まあ……………」

「へえ、どんな人?」

舞は、進めていた足を止めて振り返り頭を傾げ始める

「ふむ、どのような人物かと聞かれると難しいな。……………一言で言つと、最前線でまわりを囲む幻獣を自分より背が高いという理由で全滅させる様な奴……………だな…」

「……………」

人間ですか？と本気で思う速水くんなのでした（笑）

「ッ！！？」

なかなかショッキングなカミングアウトがあつてから数分後、連絡があつたバス停付近まで歩くと、突如舞が走り出した

その先には、自分達と同じ制服に猫の耳の様な形をした黒いニット帽を被つた小柄な少年がいる

「ん？……おっ！よお、舞じゃねえかあ！！」

ニット帽の少年は、舞に気が付くと気軽に片手を挙げる

この少年らしい……

.....

しかし、舞は答える事なく、真っ直ぐ少年へと全力疾走する

「? ? おい、どうして」

ガチャツ  
.....

「はっ？」

ド  
ウ  
ン  
ッ  
!!

「つ！！！！！！？」

「……………何故避ける？」

『何故！？どんだけ理不尽なんだよ！！！？会って早々、眉間に銃を突き付けられて宣言なしに発砲って、避けなきゃ死ぬわぁ！！！（怒）』

「……………普通は避けられないと思うよ？」ボソッ

その光景を眺めていた速水が思わず洩らす

「ええい！うるさい！！この大うつけが！！！！！！」

手に持つ銃のグリップで殴りかかる芝村

『フッ、そんな攻撃、既に見切ったわぁ！！！！』

間合いを見極め後ろにバックステップすることで回避しようとする  
クオン

……………が、

グニッ……

『ちょ、おまつ！！足を踏むって反そk……（メキヨッ！）ガベ  
ラッ！！！』

奇声をあげる少年

『……………ッ！！！……………！』

グリップがめり込んだ側頭部を押さえながら悶絶する

そんなある意味、アホとしか言い様のないやり取りに速水は啞然と  
していたが、ハッと自分に帰ると慌てて二人の元へと走っていく

「ちょっと、芝村さん！首はダメだよ！！そっちに首は回らないか  
ら！！！！（焦）」

『…ども、はじめ、まじで、如月クオンです（泣）』

顔をボコボコに腫らしたクオン

「「「……………」」」

反応に困り、黙る1組の面々

「ハハハッ…（汗）」

事情を知っており、苦笑いを浮かべる速水

「……………」

不機嫌そうにそっぽ向いた舞

……………なんだこの状況は……………

あの後、キッチリと舞にシメられたクオンは、5121小隊のプレハブ校舎へ引き摺られて来ていた

「……………如月は、お前たちとほぼ同年代だが、既に実践経験もある。主に戦車兵、スカウトとして動くから仲良くしとけよ」

「「……………ッ!?!」」

ヘヴィメタな格好をした女性【本田節子】の言葉に少なからず驚く  
新人達

まだ、訓練中の自分達とほぼ同年代で既に前線に出ているのだから無理もないだろう

「あんな、チビが（ねえ）！？」

ブチッ  
…

この瞬間、教室内の面々は聞こえる筈の無い、何かが切れる音を確認に聞いた……

「……………」

クオンの背後に見える筈のない真つ黒なオーラがユラユラと立ち上る

「誰がドチビじやゴリアアアアアアア！！！」（怒）

ガチッ  
…

[illegible]

..... ! ! ! ! ! ! !



クオンは、どこからともなく二丁のサブマシンガンを取り出すと、教室内で乱射して暴れだす

吹き飛び机

穴が開く壁

『言った奴は、正直に言え！！今なら、八分殺しにオマケで二割殺しで勘弁してやる！！！！』

「それ、もう普通に殺してんじゃないかよ！！（汗）」

『そんなの知るかボケエエエエエエエ！！！！！！！！』

頭にゴーグルを付けた少年【滝川陽平】の必死なツツコミを凄まじい程の理不尽さではね飛ばすクオン

『オラオラオラアア！！トリガアアハッピーイー！！ヒヤツハアア  
！！！！！！！！』

……数分後、暴走したクオンは【若宮康光】と【来栖銀河】のスカウトコンビによって取り押さえられ、本田と舞にキッチリ、シバかれました（笑）

この時、小隊内ではある一つの暗黙のルールが誕生した

……如月クオンに身長のことを言っではいけない……と、

これが、【第5121独立駆逐戦車小隊】と【自称・悪の親玉】と

のファーストコンタクト…

## 第一章『ファーストコンタクト』（後書き）

……………文才って書いていれば成長するのかなあと本気で思う今日この頃です（笑）

題名は、まだ考え中なので近い内に変更したいと思います

それでは、感想や希望がありましたらドシドシ下さい

## 第二楽章『出勤命令と久しい笑顔』（前書き）

ども、最近イベントやらでドタバタしていた自称・魔法使いです

今回も相変わらず好きに書きまくっています

事故らないと良いけど…

…それでは、どうぞ？

## 第二楽章『出勤命令と久しい笑顔』

ある意味、衝撃的なファーストコンタクトから三日が過ぎた日の朝

「今日から三日後のAM05:00に出勤命令が出ました」

教卓に立つ眼鏡を掛けた男性【善行】が淡々と告げる

教室内はザワザワする事なく静まり返る

「授業は一時中断。各自、気持ちの整理、訓練、準備、休養と自由に過ごして下さい。以上、解散」

それぞれが席を立ち思い思いの場所へ向かう

『なあ、委員長』

「何ですか、如月君？」

『なあんか、今回の出勤、意図的なものを感じるんだが気のせいかな？』

「……さあ、どうでしょうね？」

『……まあ、良いや』

クオンは踵を返し教室を出ていくとする

「どちらへ？」

『購買部だよ、朝飯まだくってねえからな』

「そうですね………如月君、一つお願いしても良いですか？」

『内容によるな』

「なに、簡単な事です。戦闘班のメンタルケアをお願いします」

『イヤだ』

「即答ですね（苦笑）」

『そんなの瀬戸口とかにやらせるよ、アイツの方が適任だろ？それに、面倒だ』

「そっちが本音でしょ？まあ、実際戦場にも立っていますし、歳も近い方が良いでしょう。お願いします」

『……………気が向いたらな』

「ええ、それで構いません」

クオンはその声に答えるかのように片手をヒラヒラと振り、教室を出ていった

ガラガラ…



『ういゝす、石津居るかぁ？また、来たぞ』

小隊の詰所の立て付けの悪いドアを開けクオンが中に入っていく

その手には、大量の焼きそばパンが握られている

「……………また…きた……………の？…」

部屋の中央に置かれた大きなテーブルで黒くややウェーブがかった髪に赤いカチューシャを付けた少女【石津萌】がたどたどしく小さな声で言う

『まあな、皆が暗い雰囲気で訓練しててなあ、こっちが参っちまうよ……………そんな事より、飯食うからお茶淹れてくれよ』

「……………」コクリ

石津がポットからお湯を出し、お茶を淹れる

ガラガラ…

ドサッ

『ふう〜…』グデー

クオンは、パソコンの前にある可動式のイスを引っ張って来て座り、テーブルにダレる

「……………」コトリ

『ん、サンキュー』

揚々と目の前に置かれた緑茶を一口飲む

『ズズズ……………、ふはあ〜…、やっぱり緑茶はうめえ〜な』

その後、大量にある焼きそばパンを一つ掴みパンツと開ける

『ムグムグ……………、石津は今度の出撃どう思っただ？』

「……………」

クオンの問いに石津は黙って俯いたまま自分が座っていた椅子に座った

『ハハッ、やっぱり不安か（笑）』

「……………なぜ？」

『あん？』

「……………なぜ……………笑って……………いられるの？……………死ぬ……………かも……………しれない……………のに……………」

『なんだ、そんな事かよ。俺は死なねえし、負けねえからさ（笑）』

「……………」

『…ング……………どうせ、今回は出勤と言っても所詮は初陣だ。小物共ぐらいしか居ねえよ』

パンツと更にもう一袋焼きそばパンを開ける

『……ムグムグ……そんな小物風情が何匹掛かろうが俺は殺せねえよ』

「……み……んな……は？」

『あア？他の連中か？』

「……」コクリ

『ん……、他の連中がどうなるうとどうでも良いんだが……。まあ、死なせねえと思うぞ？俺の負担が増えるし……』

『だからよ……』

ポン

クオンが腕を伸ばし石津の頭の手をおき撫でる

石津の体がピクツと強張る

『…そんなに暗くなるな。お前が暗くなったら俺がここで飯を食う意味が無くなるだろ』

「……………」コクリ

強張っていた石津の身体から力が抜け、表情も柔らかくなる

そこには、もう先程までの暗い影はない

『ククッ、じゃあ、帰ってきたら屋上でデカイイベントでもやるか。ただし、素敵過ぎて俺様に惚れるなよ』

「……………」

『……………すまん、今のは俺も恥ずかった』

／／／

それから、暫く二人は他愛もない話をしながら（主にクオンが話を  
して石津が相づちを打っただけだが…）時間を過ごした

『ん？やべッ…』

日が高く昇った正午にふとクオンが呟いたと同時にそれは来た

ガラガラッ！！

「クオン！！昼飯にするぞ！！！」

ドアをピシャリと開けて入ってきたのは舞だった

『…もう、そんな時間か？てか、よく俺の居場所分かったなあ。盗  
聴器でも付けてんのか？』

クオンの冗談混じりの言葉に舞の目は泳ぎ出す

「い、いや…そ、そんな事は無いぞ？…（汗）」

『……頼むからともらないでくれ……怖いから……（汗）』

クオンは、椅子から立ち上がりまだ何個か余っている焼きそばパンの一個を取ると…

『石津、コレ余ったから一つやるよ』

石津に投げて寄越した

『じゃあ、行こうぜ。何処に行くんだ？』

「うむ、味のれんだ」

『あいよ、さっさと行くか』

舞は頷くと先に部屋を出ていく

その後を追って数個の焼きそばパンを持ってクオンは出ていく

『じゃあな、石津。またお茶淹れてくれよ』

ガラガラ……ボタンッ！

一人になり、静かになった詰所で石津は自分の手の中にある焼きそばパンを見ていた

ふと、クオンに撫でられた事を思い出す

あの不器用で荒っぱいけど優しい暖かさに胸の鼓動が早くなる

顔が熱くなり、自分でも赤くなっている事が分かる

あの不器用な【優しさ】が石津にとって、衝撃的だった

かつて、酷いイジメが原因で対人恐怖症になり、まともに会話する事が出来なくなっていた自分に初めて気軽に【会話】してくれる優



しい人…

「……………」

ふと、詰所にある鏡に目が行く

そこには案の定、首まで真っ赤になった自分の顔が写っていた

微かな笑みを浮かべて…

そつと、自分の手の中にある焼きそばパンを見る

「……き……さ……らぎ……ク……オン……君……」

心に染み渡る様に、彼の名を呟きパンツと袋を開ける

一口、口にすると更に笑みが深くなる

「……………おいし……い……」

その満面の笑顔は、何年も見ることがなかった【綺麗な笑顔】だった



## 第二楽章『出動命令と久しい笑顔』（後書き）

……………あれ？

何かこの様子だと戦闘がまだ先になりそうだなあ（汗）

てか、今回は戦車組ではなくまさかの【石津萌】の登場でしたね

しかも、何やら今後も主人公と絡んでいきそうな空気……………

まあ、仕方なくのんびり好き勝手に書いていきます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7464x/>

---

高機動幻想ガンパレードマーチ～風を渡る悪の親玉(ラストボス)～

2011年11月30日21時50分発行